

「やめ…っ、やめろって……っ！」

気づけば二人の巨体に押しやられるように、デスクの天板に背を預けていた。

会話しながら少しずつ、彼らはこちらの躰を押し倒していったらしい。

これはまずい。

「ああ…ッ！？、」

慌てて起き上がろうとして、片方の乳首に刺激を感じた。

見ると、教頭が学ランの前立てから手をすべりこませ、制服のシャツごしに乳首をつついていた。

「…なに、やってんだよ」

「別にい～～？」

今や、学ランのボタンはすべてはずされた。

「逃げても、いいんだよお？」

校長ももう片方の乳首をつついてくる。

二人は、身を起こしかけた春樹の両乳首を、シャツごしにカリカリと軽く爪を立て、いじってくる。細かな刺激が皮膚の奥に伝わって、

「な…やめ……ろっ……っ、」

春樹の整った顔が見る間に紅潮した。

「あれ～？春きゅん、制服のシャツの下、なにも着てくない？」

「ほんとだ～～」

はっとする。

二人にあれこれされるのが日常的になりすぎて、いつしか下着を身に着ける習慣を春樹は放棄していた。

よりによって、こんな日にまで着忘れてきてしまうなんて——！

「もしかして、実は期待してたんじゃないのお～？」

「やっぱり、春きゅんはツンデレだね」

「あ…っ♡♡ああ…っ♡違っ……あ、♡」

下着を忘れたのは本当に致命的だった。

カリカリ……、カリカリ……、と、左右から軽くくすぐるような爪の感触を感じる。

シャツの布の繊維がひっかかるざらりとした感触が、奇妙な疼きとなって皮膚の奥に伝い落ちる。

「あ…♡だめ……だっ……て、」

息がふるえる。

どんなに抑えても、やがて、ぴく…っぴくん……っつと全身が小刻みに跳ねだす。

「だから、逃げてもいいって言ってるじゃん～」

「ほら、別に僕たち押さえつけてないし」

たしかに、前方は一分の隙間いちぶもないほど二人の肉に埋め尽くされているが、脚を肉の間から抜き、左右に身をひねれば逃げ放題とも言える。

しかし――

「あっ♡いや…っ！ああ…っ♡♡、」

両乳首をカリカリといじられ続けるうち、体の力がまったく入らなくなる。

性的なことなどまるで知らなかった三年前は、胸をくすぐられるくらいでは何も感じなかった。

こんなふうになるように、されてしまった。

この二人に。

三年間かけて。

「おお……、春たんっ、今日は、早いねえ！」

「ああ……ッ♡♡！」

ストラックスごしに教頭に股間をもまれ、大げさに腰が跳ねる。

すでに形を持ち始めたそこを、むちむちと太った大きな手で、軽く、しかしやや乱雑に^{さわ}触られる。この三年間何度も二人に^{さわ}触られるうち、少し乱暴に^{さわ}触られるくらいが^い好いとを感じるまでになってしまった——なんてことは、絶対、この二人には言わないが。

「あ～、さすがにこっちは履いてたか」

ごく自然な手つきで春樹のベルトをはずし、ストラックスを引き下ろした校長が残念そうに言う。

「当たり…前だ……っ！」

すでにはあはあと息をあらげながら、春樹は顔だけでキレた。

躰はもう動かない。動けなかった。

気づけば、また背中が天板についている。膝から下だけを天板の端から下ろした状態で、春樹はデスク上に完全に寝そべっていた。

「じゃ、今日は僕からね～」

校長がワクワク感を隠しきれない声で言い、なんの躊躇^{ちゆうちよ}もなく春樹のボクサーパンツを引きずりおろす。

「やめ…ろって！…ッあ、」

抵抗する間もなく、股間に生ぬるいものを感じる。

校長が頭をかがめ、春樹の脚の間のもを口に含んでいた。

「あ…っ♡あぁ……ッ♡♡、」

すでに芯を持ちはじめていたそこは、男の口内でまたたく間^まに硬くなる。

狭く窄^{すぼ}められた肉厚の口内はねっとりとした唾液であたたかい。そんな場所で、

竿にむしゃぶりつくように、これまた肉厚な舌に絡みつかれる。

「ああ…っ♡♡う…っ、♡ん” …っ♡、」

じゅるじゅると粘性のある唾液をまぶされ、分厚い唇で竿を上下に行き来されだす。誰がどう見ても気持ちの悪い状況だというのに、春樹のものは萎えるどころか、ますます熱く張りつめていく。ぞくぞくとした痺れが腰から這いあがり、背筋を駆ける。

「腰、びくびくしてるねえ～」

横で見ていた教頭が、ぴよん、と飛び跳ねながら言った。

校長にしろ教頭にしろ、この三人だけのときは変態感をまるで隠そうとしない。

厳格な家柄の親戚一同や、この学校の教員たちがこんな二人を見たら——、一体どう思うのだろう。普段の真面目一徹な二人と違い過ぎて、卒倒する者が出るに違いない。

「あ”、ああ…っ！♡♡♡」

じゅッ、じゅるッ！と音が立つほど強く短く吸われ、細腰を突き出すように跳ねさせてしまう。下半身裸で、けれどソックスと上履きだけは履いたままという滑稽極きわ

まる姿で、変態に向かって腰を突き出している自分。

何度同じ格好をさせられても、この恥ずかしさに慣れることはない。

「も…^い達っちゃうから……も……終わ……り……あ……っ♡♡終わりって、言っ……っ、っ♡、」

れろれろと、校長はしつこいくらいに亀頭を舐めずる。

感じやすい、亀頭と竿の境目にまで舌を這わされ、また喉を晒して喘いでしまう。

涙目になりつつ勝手にがくがくする腰を抑えようと努めていると、

「そろそろ、こっちも触ってあげようねえ～」

「ひっ、♡♡♡」

きついくらいに張りつめた竿と玉菊の、そのもつと奥。密かに息づいていた場所

に、校長が指を触れてきた。

「い…っいや……！」

そこは蕾のようにふっくらと充血し、ひくひくと開閉していた。

「あ、……♡、」

三年間、二人の男にさんざん弄^{いじ}られてきたそこに、ゆっくり指を沈められる。
とたんに孔内のひくつきが増し、男の太い指をきゅうっと締め付けてしまう。

「僕、こういうとき太ってて良かったって思うんだよね」

「わかる。なんか……自分の指、太くて実質チンポだよなって思うよね」

気持ちの悪い与太話をはじめ、校長と教頭。

「ほ～～ら、春きゅん、校長の指チンポでしゅよ～～」

「やめ…あ” ツッ!♡♡♡」

ずぶずぶとなんの苦もなく挿入^{はい}ってきた指頭に、感じる場所をピンポイントでつかれる。

「ここだよねえ？春きゅんの、好きなところは」

「あ” ツッ♡♡だ…ああ……ツ♡だめ、押さな…っで、…っああ…ツ!♡♡、」

孔内の中間あたりにある、腹側の一点。

そこを太い指の腹で容赦なく押しつぶされるたび、びくッ、びくッ、と何度も腰が跳ねる。

すでに潤んだ瞳から生理的な涙がこぼれそうになる。

「あ～～、もうこうなってきたら、もっとじゅぼじゅぼしないと、満足できないねえ？」

そばで見ていた教頭が、あやすような声で言う。

「う…っ違…っ…ッああ…ッ♡♡！あ…ッ！♡！」

校長は、凶太い指でゆっくりとなかを行き来しはじめた。

弱い場所をピンポイントで責められるのとは、また違ったつらさが春樹を襲う。

「あ…っ♡♡あ…ッ♡だ…め…っ…っあああ…ッ♡♡♡、っ、」

見る間に孔は潤った。

濡れた肉のあわいを、ぬるぬると凶太い指が移動する。その感覚に、熱くなった肉壁がひくっひくっ、驚いたように収縮する。

「あ…っ♡ああ…っ♡♡っあああ…っっ♡、」

指の速度は、どんどん速くなる。

ぬるぬる、ぬるぬると濡れた場所を行き来され、思考があいまいになるほどの悦楽が腰の奥から湧きあがる。

いけないと思いつつ、頭がかすむようなこの気持ちよさに身を任せていたくなる。

「あ…っ♡いや……いやあ……っああっ…♡っあ……♡、」

ぬちっ♡ぬちっ♡ぬちっ♡……

卑猥な水音が響く。

厳格な雰囲気はこの部屋に、およそ似つかわしくない音。

視界の隅には、この学校の部活動が獲得したトロフィや賞状、それから運動会
のときに掲げる校旗なんかも見える。

こんな場所で、あろうことか校長の机の上で、下半身を露出させられ、人に言えないような場所に指を突っ込まれよがっている自分——。

「ああ…っ♡♡も……っ、や……ああ…っ♡や…だ…、ああッ！♡♡♡」

目も眩むような羞恥に否定の言葉を漏らせば、仕置きのように、感じる例の場所